

1月14日

Copyright: Takumin

近代自由主義社会においては分離が重視される。近代以前は分離は否定的な概念・制度として理解されていた。近代に入ると分離・ある種の対立によって自由が保全されると考えられるようになった。一口に分離といっても多種多様でどの分離が望ましいか特定せねばならない。なぜ分離が自由の保全に結びつくのか？なぜ分離が存在するのに社会が崩壊しないのか？分離を前提としつつある種の調和・秩序を維持するにはどうすればよいのか？現実とは違う画質としては平等であると考えたのがトクヴィル。デモグラシーにも危険な側面がある。個人がそれぞれバラバラな存在となると危険である。なぜなら国家に絶対的権力が集まり、暴走しかねないからであり、そうなった時にばらばらの個人は抵抗できないから自由を失う。そこでトクヴィルが注目したのが中間団体。これがあることで国家権力が制限される。国家・政治権力は個人的自由を保障するためにあるとリベラルは考える。このように世の中が民主化していくと他社へのシンパシーも増幅すると彼は主張する。貴族と小作人はまったく別種の存在とそれまで考えられていたが、同じ人間と考えるようになる。そう考えると人類愛が生じると彼は説明する。人類という概念がそこで一般化する。トクヴィルは一方で同時にそれによって実際の義務感が薄れていくという。相手へのシンパシーは持つが何もしない。昔の考えでは、遠くの人ことはあまり考えないが、自分の周りの人が苦しんでいれば助けようとした。狭い代わりに義務感が強かった。現代においてはいろんな人にシンパシーを抱くが実際に助けようとはしない。このようなリベラル的心情が19世紀において支配的になるか落ちうとそうではなかった。イギリスとアメリカは例外で、リベラルな政治文化が定着したが、大陸においてはルソー主義的な伝統が勝利する。ルソー主義的とは一般意思ということである。一般意思は正義の意味であるから制限されない。それが国家の正当原理になると国家に権力が集中することになり、さらにそれが制限されない。フランス革命の後で様々な混乱が続くが、ナポレオンに着目する。彼一人が国民を体現しているという考えが出てくる。これはルソー的であり、ローマ的でもあった。代表性は議会において国民の意思が表現され、議員は国民によって選ばれるのでからおじて自己支配が可能であると考えた。ルソー主義者は直接民主制は不可能で仕方なく代表制に移行すると考えるが、リベラルはそうは考えない。彼らは分離という概念を重視する。アダムスミスの労働分業を創造する。個々人が異なる仕事に従事することで結果的に効率が良くなり全体の善が増える。だから政治に向いているマイノリティーが政治をすることはベストなことであると考え。なぜそれがうまくいくかということはいまうまく説明できず、社会的アプローチにならざるを得ない。その神話が崩壊する。そうするとリベラルな政治によって世の中がうまくいかないということになると別の原理・システムを人々は求めるようになる。19世紀においてどういうシステムが支持されたかというマルクス主義・社会主義であった。これは資本主義を否定するコンテキストとして生まれた。その話はさておき、一人の人間に権利を移譲するという発想がナポレオンの政治になる。それがカエサル。一人の人間の支配が全員の支配、一人の命令が全員の判断と考えられるようになった。ナポレオンは人民投票によってその地位を得た。下からレジティマシーを取ると同時にトップダウンの政治システムを採用し、様々なシンボルで自己のレジティマシーをアピールした。これがカエサリズムである。リベラルは合理的に社会を再編成しようとしたのに対し、カエサリ

ズムは合理的なものに加え神話なども利用した。いろんなものを使って自らの権威を強化しようとした。啓蒙思想家は非合理的な要素はいずれなくなるだろうと考えたがそうはならなかった。どうなったかという合理的なものと非合理的なものが融合する、ナポレオンがそうであった。これは20世紀になるとさらにエスカレートする。ナチスはゲルマン神話という歴史的根拠のないフィクションを打ち立て、人々はそれを信じ、支配された。なぜそれを人が受け入れてしまうかが政治の不思議なところである。現代においても仮に今のシステムが破たんすればかなり怪しいフィクションが出てくる可能性はある。重要なのは非合理的要素が政治の空間から消えないということである。その合理性と非合理性とが融合するという現実を認め、それがどのように結びつくか理解する必要がある。ナポレオンもドホルもヒトラーもある危機に直面した時、一人の人間に全てを託すという現象がしばしば見られる。それを英雄待望論という。この人なら国を救ってくれるという考えが出てくる。ナポレオンは戦争でレジティマシーを得たから戦争で負ければレジティマシーを失うことになる。ナポレオンは二度負け、権力を全て失った。ナポレオンが皇帝に着いた時は世襲制がとられていたが、ナポレオンが負けるとだれも彼の息子を皇帝にしようとはしなかった。同意が正当性の淵源であるから安定しないのである。ナポレオン支配によってフランス人は一定の経済的繁栄を実現することになった。しかしナポレオンは周辺諸国も支配し、帝国を作ろうとした。ナポレオンは、人民の名において、諸国の人民を解放するために、という理由で侵略をした。ドイツの場合は人民主権者がたくさんいる。そのような人たちは彼を解放者として大歓迎した。ヘーゲルはナポレオンは馬上の世界精神と絶賛した。ベートーベンもナポレオンを尊敬していて、人民に自由をもたらす存在だと信じていた。1804年にナポレオンが皇帝になるとベートーベンは怒り狂ったという逸話もある。彼の支配は実際は過酷なもので、他国の物を略奪し始めた。ドイツやイタリアの人たちは侵略戦争であると解釈を変える。そこから反フランス・反ナポレオンの思想が生まれる。ロマン主義。支配されているという反発から、反フランス的・反ナポレオンのものを目指す。ナポレオンは文明を重視した。よってロマン主義は文明を否定し、文化を重視するようになった。普遍に対する個別、文明に対する文化、等といった形でアンチフランスで攻めていく。それはデモグラシーの否定にもつながった。それがファシズムの期限であると言われている。ロマン主義的なものは人々の心に響く。音楽でも文学でもインパクトがある。矛盾とか人間の悲劇を徹底的に描写しようとした。その魅力というものは合理的なものから生じるのではなく、非合理的な破局とか悲劇の中から出てくる。芸術としては素晴らしいがそれと英字を混交してしまうと大変なことになる。リベラルはそれを目指した。芸術家は天才である。ある種の軌跡によって何かを創出する。神が世界を創造する時の力が芸術的なインスピレーションの源。そういう発想が出てくる。それを政治的に利用するとどうなるかというと、政治家＝芸術家という考えが認められることとなる。政治家というのはある種の芸術家で、その天才に政治を任せるのがベストという考えが出てくる。非合理的な要素も積極的に用いるから歴史観も変わる。啓蒙主義者たちは合理的な歴史観に基づいて考えるが、ロマン主義者は矛盾とか悲劇とか言った要素を歴史の中にうまく取り組もうとした。世の中には様々な矛盾があるがそれさえ合理的であると考えた。肯定される要素と否定される要素が存在する。その両者が対立すると矛盾が生じ、その中から新しい何かが生まれ、その中から審理が生

じると考えられた。そうすると個別的な歴史的な要素が肯定されることになる。具体的にいえば奴隷制や戦争、殺戮が必要であった。歴史が進歩するために、歴史の究極の目的を実現するためには必要な要素であったと考える。そのような歴史のダイナミズムが歴史を動かしており、人間は我々の役割を果たしているにすぎない。そういった考えがナチズムに流れ込んでいく。さらに20世紀に入ると第一次世界大戦がヨーロッパ全体を巻き込む形で起こる。その後にドイツなどはある種の破局を迎え、デモグラシーのシステムが破たんする。経済的な危機に直面し、失業率が高くなり将来に不安を抱くようになる。議会も解決してくれない。そのような状況下で人々が求めるのはリベラルな人ではなく、その状況から救済してくれる英雄を求める。そこにナチス党が登場する。人々はヒトラーに希望を見出し、彼が権力を掌握することとなる。そのような体制、一人支配、一人の人間が全体を体現するというレジティマシーの原理を新たに定式化した思想家がいる。カールシュミットという思想家。彼はリベラルな政治を批判する。なぜなら個人主義的であるからだという。政治の目的が個人の自由を保障するためというのはナンセンスだと彼は主張する。彼は政治というものを次のように規定している。まず、政治的なものは例外状況において友と敵を区別するための決断の契機である。つまり、通常のルール、制度、が停止する状況ではルールにのっとって問題を解決できない。その時に決断をするものが主権である。戦争になった時にルールが無視されることもある。その時に国家を救う必要がある。政治というのはその例外状況において、政治的な決断、つまり秩序を形成するための決断をする行為であり、その行為者が主権者であると主張する。システムが崩壊した時に最も必要となるのが政治であるというのがシュミットの考えで、それは友と敵を判断することでもある。政治的単位では時により個人の命を犠牲することが必要だが、リベラルの考えはそれを正当化することはできないと自由主義の理論では危機から脱却できないと主張した。これはあくまでリベラルが崩壊し、現行のルールが通用しない状況での理論である。そのような状況下、独裁者が無から秩序と平和と国民の安寧を生み出し、それが真の主権者で、その人が国を救い、再びルールにのっとった政治が可能になると主張する。危機的な状況において秩序を形成することが政治であると彼は主張する。ドイツは戦争に負け、その後人権を重視する人々が新しい世界秩序を形成しようとし、国連ができ、世界人権宣言が成立する。シュミットの時代は議会が機能不全であった。重要なのは危機的な状況において我々がどのように判断するのか、どのような政治を望むのかである。日本国憲法では人権の不可侵性が述べられている。そこには合理的な根拠はない。最終的に重要なのはオピニオンであり、人々が共有する思想である。人権という言葉も思想によって解釈が変わる。政治がいかに危ういもので、オピニオンの上に成り立っているものであるかを最後に述べる。もう一つの問題は今日ヨーロッパで重視されているテーマとして代表性の危機。戦後に人権レジームができ、それなりにうまくやってきた。代表性が機能するためには代表者がある程度信頼している必要がある。そうでないと正当性の危機が生じることになる。今まさにそのような状況にある。多くの国民は代議士を自らの代表者と考えていないし、代議士の利益と自分たちの利益が一致しているとも思えないのである。ということでヨーロッパでは新しい有効な解決策、モデル理論、思想が存在しない中で代表性の危機が顕在化している。